

婦人關係資料シリーズ
一般資料第21號

最近の國際情勢について

勞働省婦人少年局

この資料は、一九五二年十月二十七日、
同二十八日の二日間に行われ、婦人少
年局が開催した国際婦人問題調査討論会

の第一日に行われた、朝日新聞社説員
福井文雄氏の講演記録です。

この資料が、国際問題に関心をもちた
る方々のお役にたてば幸です、

一九五三年 三月

労働省婦人少年局

最近の国際情勢について

朝日新聞社説員 福井文雄 講演

一 世界と日本

わたしは、いくらか原論的なものになりますけれども、最近の国際情勢を、「二つの世界」の考え方
についてお話し申し上げたいと思っております。

御承知の通り今年の四月二十八日、日本は平和条約の発効によりまして自立することになったのであり
ます。これによりまして、日本は外交上の主権も回復したわけなのでありますが、実は非常に難しい立
場にならされているのであります。

(一) 平和条約批准と各国の動き

サンフランシスコの平和会議におきまして、出席五十二ヶ国の中で平和条約に調印したのは、日
本を含めまして四十九ヶ国、今日までに批准を完了して、日本との間に国交を回復いたしております國
が三十七ばかりありますけれども、これ等の國々はいわゆる自由主義の國家でありまして、大体米英が
考えております民主主義的な考えを持って、その下に政治をやっている國なのであります。大体日本と
国交回復している國はそういう國々である。むしろ中にはインドといったように、サンフランシスコ平
和会議には参加を断り、その後日本との間に戦争終結の宣言をいたしまして、日本と新たに国交を回
復した國もあります。インドもやはり、どちらかと言えは自由主義の國家であります。ところがこれに
対して、ソ連や中共、あるいは東ヨーロッパのポーランドやチェコスロバキアの他の國々、いわゆる共産主義

一 世界と日本

- | | |
|------------------|----|
| (一) 平和条約批准と各国の動き | 一頁 |
| (二) 日本の経済的立場 | 四 |
| (三) 日本の政治的立場 | 六 |
| (四) 日本の国力 | 九 |

二 世界の動き

- | | |
|----------------------|----|
| (一) 駐ソ米大使ケナン氏の召還問題 | 一 |
| (二) ソ連の駐格 | 一 |
| (三) 米国の対ソ封じ込み政策 | 一五 |
| (四) 米大統領選挙と対ソ政策 | 一六 |
| (五) ロール、バック政策とは | 一八 |
| (六) 米国の政策に対する、ソ連の考え方 | 一八 |
| (七) 資本主義國家側に対するソ連の態度 | 二四 |
| (八) 二つの世界の対立と日本のあり方 | 二五 |
| (九) 平和の意義 | 二五 |
| (一〇) 「時」の要素 | 二五 |
| (一一) 國民の生きかた | 二五 |

の國家と言われ、日本は、日本の平和條約に反対したてであり、つまりこの平和條約というものは、むしろアメリカが極東に新しい戦争を起すための條約である。戦争の爲の條約で、決して平和のための條約ではないといふに言っており、そのまゝ、日本といふ國は完全な自主、独立の國になつたのでなくて、アメリカの支配下における従來通りの占領國であるといふに考へて、対日平和條約を認めず、したがつて日本の独立、これも亦認めようとしていないのであります。

そういうような議論から日本は折角國際連合に参加を申込みましたけれども、九月の、安全保障理事會の日本の國際連合加盟に関する討議におきまして、十ヶ國、つまり安全保障理事會といふものは十一ヶ國出來ておりますがその中十ヶ國は、日本は國際連合に協力してゐる、又、國際連合の義務を充分行ふだけの力もあるといふことで盡く賛成してくれましたが、ソ連だけは反対いたしました。つまり、ソ連から見ますと日本はまだ独立してないし、獨立してない國が國際連合に入る資格はないという簡單な理窟だけです。そのソ連の一面の反対によりまして日本の國際連合参加といふことも半分望みない状態になつてゐる。それだけではなく、最近のモスコにおきます中ソ會談によりまして、中ソとソ連は、日本は今やアメリカの手先になつて、軍國主義を復活させようといふ。斯の中ソ友好同盟條約において、ソ連は旅順の港も中ソ側に返すことになつてゐるけれども、日本の態度といふものが非常に強しく、又いつ侵略主義的な國になつてやつてくるかも知れないから、ソ連は旅順港の軍艦の使用といふものを半分まだ続ける。対日平和條約が出来るまでは続けるといふことにして、日本は斯る脅威を依然としてゆるめなないといふ状態にあるのであります。

それで日本は四月二十八日から獨立を回復しまして、世界の仲間入りをしたといふことになつておりますけれども、その世界の仲間入りをしたといふのは、いわゆる自由主義諸國との間でありまして、共產主義諸國との間には依然として戦争状態といふものが続いている。もちろん戦争状態と申しまして日本は一九四五年の九月二日、例のミズーリ号艦上の降伏文書に調印をいたしましたして、連合國と日本との

の間には休戦の状態といふものが成立してあります。ソ連と日本との間の関係も戦争状態と言ひましても、一種の休戦状態であります。決して砲火を交へると言ふような戦争状態ではありませんけれども、國際法的に見まして、これが戦争状態にある、依然として従來通りの戦争状態にあるといふことだけは、疑ひない事実であります。

日本は自由主義の國家側と結びました関係から、いわゆる中ソ連といつたような共產主義の國々との間において却つて斷層の切れ目といふものがハッキリ出て参りました。そして、日本は平和條約によつて折角世界の國々と一筋に手を繋いで行こうといふ氣持になつておりましたけれども、残念ながら現在のところは二つの陣營に分れております。世界の一方の陣營とだけしか手を結んでないといふことになつてゐるわけであり、政治的にはさういふふうになつてゐます。

ところが日本の現在おかれてゐる地位、日本が今後生き行きます上にどういふふうな状態で進んで行つたらいかにといふことを考へてみますと、日本は平和條約によりまして、日本の國土の約半分これを失つたことを少くとも米英側との間において平和條約によつて確認したわけであり、そのわれわれが失いました國土の中には、御承知の通り沖縄も入つてゐる、小笠原列島も入つてゐる。千島も入つてゐる。これ等は小さい面積であります、とにかくこれ等の地方は昔から日本の領土である、われわれの一部である。地理的に考えますと、日本は明治維新の時よりも狭くなつたといふことが言へるわけであり、また、どこが明治維新の頃は、日本の人口と申しますと約三千五百万程度だつたと思ひます。今日の日本の人口は大体八千四百万と言はれてゐる。國土は半分になる。そして人口は倍以上になつてゐる。しかもその國土たるや、非常に資源も少い、さういふ狭い國土、資源も少いところに、今までの倍以上の國民が住んでいかなければならぬといふことが今度の平和條約によりましてハッキリと決められました。日本のおかれたる地位であります。

(三) 日本の経済的立場

そうしますと、われわれはどうして暴して行くかということが非常に重要な問題になつて来る。従来戦争前の状態を考へましても、もちろん日本は自給自足の國ではなかつたわけでありませう。しかしそれでも、戦争前はお米も朝鮮や台湾から進つて参りますので、大体自給する。それから満洲からは大豆が来る、石炭が来る、鉄鉱石が来る。朝鮮からはいろいろな非鉄金属が参りましたし、台湾からは米のほかにも砂糖も来る、バナナも来るといった具合で、南洋の委任統治諸島からは石けんの材料になるゴブラも来ますし、煉銅石も来る。お魚も来る。すべてこれ等の國々から日本に大切な原料品、生活資料等が運られて来たわけでありませう。それだけでなくて満洲には約三千万の人口がございます。朝鮮にも二千万の人口が、台湾にも三、四百万の人口がある。これ等の入寇の生活必需品——着物とかあるいは靴といったような日常必需品というものは日本からこれを取つたものです。つまりこれらの地方というのは日本に対して非常に重要な商品市場である。つまり日本の経済というものは統計に表れたものよりも実はずっと大きかつたわけでありませう。自給自足の程度というものが高かつたということがござます。今日日本はこれ等の日本経済にとりまして非常に重要であつた原料や、あるいは食料品の供給地でありました。地方を失つたし、それから日本の製品を賣り捌くべき市場というものも失つてしまつた。日本が住んで行く上において非常に難しくなつたことは言うまでもないわけでありませう。

日本としましては、この小さい國土に、これだけ沢山の入寇を養つて行く上から申しますと、やはり日本の國土に出来る資源、あるいはその他の原料品というものをもつて日本人を生かして行くということは、實際上不可能だ。やはり外國から原料品を輸入し、加工して輸出する。それによつて得た金で、外國から原料品あるいは食料品を輸入する。つまり、貿易によつて日本を養つて行くより方法がない。今までもそうでありましたけれども、今後は一層その必要が出て来ているわけでありませう。

ところが貿易というものを維持して行く、あるいは盛んにするということにつきましても一番大切な

はどういうものであるかということ、平和であるということが何よりも重要な條件になつて来ている。平和でなければ貿易というものは進展いたしません。でありますから、貿易というものと平和というものは、いつでも離れられない關係にあるわけでありまして、どこでも、貿易を盛んにしようという國、あるいは實業家は、平和というものを盛んに言う。イギリスのような、日本と同じような自給率の低い國におさまして、やはり、世界が平和状態でなければいけないというので、イギリスはいつも戦争反対を言つてゐるわけでありませう。

このイギリスと日本の立場を較べましても、イギリスは、自給においては、食料品は日本等よりも自給率は低いのであります。しかし石炭、鉄鉱石といった材料を持つてゐる。でありますから大体日本と同じような自給の程度だと思つてゐるのであります。ただイギリスは何と申しまして、原料の補給地あるいは市場としてイギリスの親類である英連邦を持つてゐる。そうして、英連邦諸國の生産品に対しては、外國の生産品に対するよりも安い課税をかけることにしておりますので、市場を確保するという意味から申しますと、日本なんかよりもはるかに有利な態勢にあります。現に、この向も、日本がいわゆるガットの協定に入らうとした、ガットというものは、一般貿易協定というものが本當の名前でありまして、これは世界の自由貿易が發達するように、お互に課税率を引き下げて、各國に利用するという目的の下に作られに協定であります。これに日本が入らうとしたところ、イギリスはこれに反対いたしました。つまり日本がガットの協定に入るといふことになる、その協定を利用して、一番有利な條件であつて世界の貿易に進出する。そうすると英連邦あるいは他の市場において、日本の品物は英國品を圧迫するかも知れないという心配からイギリスは日本のガット参加に対して反対し、そうしてガットの日本参加問題は当分延びるという結果になつたのであります。それはどこまでいギリスはマケットを確保しようとしている。現在のところ日本よりもはるかに有利な協定を持つてゐる。そして日本よりも遙かに有利な市場を持つております。日本は、同じような自給の程度であるに拘わらず非常

に狭いものに限られてしまいました。
 でありますから、今後日本が貿易を発達させて日本の八千四百万の人民を養つて行く上から申上げますと、日本は非常に世界から好意を持つて受入れられて行かぬばならないと云う状態である。世界から好意を持たなければならぬ。でなければ、日本は原料を輸入することすらよく行きませんし、日本の貿易の進展ということも考えられないわけであります。つまり、日本の今後の自立というものを考えますというとき、平和ということはどうしてもなければならぬ。平和の状態において日本の貿易が速むと同時に、世界各國の好意、日本に対する親しみということになつて、少くとも日本の商品に需要を感ぜないということとは、日本にとつて、生きて行きます上に一番大切なことになつて来ていると私は思ひます。

そう云ふふうに、生きて行きます上からは日本はどうしても平和でなければならぬ。ところが先程申しましたように、

(三) 日本の政治的立場

この日本の置かれました国際的関係、これを政治的に見ますと、日本は一方の陣営に属している。日本は世界の一員になりましたけれども、これは自由主義諸國家との間にのみそうでありまして、共產主義の諸國家との間ではまだ戦争状態である。むしろ日本が米英自由國と結びました為には共產主義國との関係は悪くなつていくといふような状態であります。経済的にはこの國とも仲好くやつて行かなければ日本は立つて行かないにも拘わらず、政治的には一方の陣営に属しているといふところには日本の今置かれまして非常に難しい事態があるわけであります。しかも占領状態の間には、いろいろの不便もありましたけれどもまだ日本側において、氣易いといふこともありました。それはどういふことかと申しますと、日本がミズーリ艦上の降伏文書に調印しました時に、日本は天皇及び日本政府の統治權といふものを、連合軍總司令官の制約の下に置くといふことを約束したのであります。統治權といふたものは絶対に自由でなければならぬ。つまり、主權といふものは束縛を受けてはならないのであります。その主權といふものを自ら制約するといふことを約したといふことは、つまり日本は主權を捨てたと

内の上

いふことになるのでありまして、つまり、連合總司令官の下に統治された。これを甘受して日本は主權を失つた。つまりマツカサー元帥といふものが日本の統治者であるといふことになつたわけであります。非常に日本として残念なことになつたわけでありますが、その代り、戦争後の日本の政治というものがどんなに悪化するが、あるいは他人にどんなに迷惑を與えようが、それは日本の責任ではなかつた。すべて連合國の總司令官といふものがこれに對して責任を負わなければならぬ。ですから、例えば連合軍が日本政府のやり方について不満がある。日本の現在の政府といふものが段々／＼労働組合を弾圧したりするといふようなことで抗議をしようとした時に、日本政府に直接抗議することは出来なかつた。つまり、日本の政府につきましても最高責任を持つております連合國の總司令官にこれを抗議しなければならぬ。でありますから、ソ連はいつでもワシントンの極東委員会、あるいは東京にありまして対日理事会といふものに對して抗議を提出したわけであります。つまり日本は國際的に見ますと責任がなかつた。だから日本といふものは、占領の時代におさましてはある意味で申しますと、温室の中の生活を続けることが出来たわけであります。世界にどんなに冷たい風が吹きましても、日本は占領國連合軍の占領といふそのガラス張の中にあつて、壽かに、戦争に傷いた身体を養うといふことが出来たわけであります。

ところが、講和條約の発効によりまして、日本は自主獨立ということになつたわけでありまして、つまり、従来日本を、直接世界の冷たい風から防いでくれた温室のガラスといふものをなくしてしまつたわけでありますから、直接日本は世界の冷たい風にふれるようになったのであります。つまり、世界の荒波を、日本は自分の力でこれから元、しのいで行かなければならない。これは、日本の自立、自主ということから見ますと、非常に善いことではありますが、日本にとりまして非常に大きな問題を提出した

わけであります。自主は出来ましたが、日本が世界の荒波を自らの力によつて渡つて行くという
ことは非常に困難なことであります。戦争前でありまして、形勢的にはあつたかも知れませんが、
かく日本は世界で有数の軍事力というものを持つておつた。自分の力によつて、世界の動きをある程
度動かすことも出来ないことはなかつたわけでありまして、日本の軍國主義というものが、日本の軍備
の力は経済力というものを盛んに悪用しましたけれども、若しこれをいい方に使えば、世界に平和戦争
が起りました。極東の平和を維持するといふくらいのことでは、日本の軍事力でやることも出来た。つ
まり極東においては、平和の維持も日本の力によつてある程度成就することが出来たわけでありまして、
ところが今日は御承知の通り、日本には何等の軍事力といふものもありませんし、又経済力も先程申
しましたように、自立の生活は益々減りましたし、アメリカの特需、特需といつたものでやつと外貨
を頼りまして、これによつて国際收支を續けてゐるのであります。とて外貨の世話や極東の平和、
極東の経済の繁栄を図るといふ力はない。つまり日本は主權を回復しまして、又世界に對して何等か
の貢獻をすべき地位を回復しましたけれども、今のところは日本という國はまだ世界の一部分に對しても
これを動かす、あるいは世話を焼くといふことは出来ない。日本は今日世界の一角とはなりましたけれども
も、まだ外國を動かすといふような地位にはない。むしろ先程申しましたように、温室を出て、直接世界の
冷たい風に吹かまうられる。世界の力によつてふり廻されるといふような状態になつてあります。われ
われは、どんなに世界ののためにやろうとしましても、残念ながら力もないし、むしろ世界の動きによつて
日本は動搖されるといふような變身の立場にある。これはわれわれとして非常によく考へておかねば
ならないとだと思ひます。

四 日本 の 実 力

非常に悲觀的なことを言うようにお聞きになるかも知れませんが、日本におりますといふと、日本の
新聞といつたようなものに、われわれは何か少しもわされて何だか世界といふものは日本を中心
として動いてゐるといふような錯覺を起しかちであります。例へば、総選挙がある。そうすると、世界
の関心の中に総選挙をやろうとしてゐる特と云うと、世界の人がみんな日本の総選挙を見守つてゐる。
とやうもすれば思ひたい。ところが實際のところ、日本の総選挙の記事といふものは、世界の新聞にと
れだけ載つてゐるかといふことになりまして、甚だ心細い次第であります。ほとんども、日本の選挙の
向蹠なんかについて書いてある新聞はないのであります。世界各國の人はかゝる何等考へてない。
覺へてゐないといふことが言えるのではないかと思ひます。もちろん、日本に特別の關係のある人、
あるいは世界の外交を考えてゐる人達は、日本の総選挙の傾向、その意義についていろいろ考へもし
てゐるかも知れませんが、世界の大部分の人達は、おそらく日本の総選挙にどれほど興味を持つたかとい
ふことになると思ひます。私も戦争後、ヨーロッパからアメリカに参りましたが、日本に居り
ますと、ワシントン問題にしろ、何の問題にしろ、日本を中心にしてゐる気がしました。かういふ行
きと、ことにヨーロッパなんかはまるで日本のことなど忘れておりました。日本なんかは、なくても
一向差支ないかのように世界が動いてゐるやうに感じて、非常に心細い気がしたことを覚えておりました。
す。やつと参りに、インド、パキスタン等に参りまして、アジアの國々がまだ日本に對して非常な期待
を寄せてゐるといふことを感じまして始めて嬉しい気がしたやうな状態でありました。とにかく、日本
では、世界、世界人——といつたやうに言つております。又、今後日本は世界人として努めなければ
ならないことは、山崎先生が、世界の人は日本に對して非常に期待してゐる。と云ふ。とんでもない
あるいは日本の門閥といつても、非常に大きく考へてゐるといふやうに、考へます。と、とんでもない
間違ひを起すのであります。まだまだ日本といふ國はそんなに自惚れるべき時代ではない。オリンピ

マサの言には、新聞が非常に日本が勝つように言つておりましたけれども、實際やつてみますと、海上戦技も惨憺たる状態であるし、水泳も駄目であるし、マラソンだつて全然問題にならないという状態でありまして、とにかくわれわれは、自分達の力というものを先ずよく知つて、それから始めなければならぬというふうな感じがいたしました。

大分余談になりましたが、そういうふうには、今日日本の世界における地位というものは非常に下つております。そして日本の立場というものは、むしろ日本が世界を動かすというよりも、世界に動かされるという場合のほうがずっと大きい。それでわれわれは、今後、世界を日本の好きなように動かすというよりも、世界がどういうふうな動いていくかということをよく考えまして、これに答じてどういふ世界の波の打ち方、あるいは風の吹き方というものをよく考え、同時に日本がいかに平和的に生きていくかということを考えもし、やつても行かなければならぬというふうな思ひのであります。やありますから、日本における国際問題の研究というものは、はた前の場合よりも大加になつて来ていると思つて、それから、こういう会合が行われるといふことは、日本にとつて、非常に大切なことだと思つてあります。で、そういうふうな立場から見まして、今日世界がどういふふうな動いているかということについては、概略的にお話を終けて行きたいと思つてあります。

二、世界の動き

戦争後の世界というものが、米ソの対立を中心にして動いているといふことは皆さん御承知の通りであります。戦争中におきましては、少くともアメリカのルトスヴェルトの考えとしましては、戦争中における米・英・ソ、この三国の協力を戦後の世界平和の建設にうつしうえる。この三国の協力で世界の平和を固めようといふことであつたことは疑ないものであります。これがよかつたか悪かつたかといふことは、簡単に言えますが、その後の世界は段々々々悪くなつて、そして米・ソの対立というものが激しくなりました。世界の情勢が米・ソの対立斗争を中心として動いているといふことは、残念ながらおれとして認めなければならぬ。でありますから、今後の世界を考える場合におきまして、この三国の國がどういふふうな考へて行くかといふことを知ることは一番大切になつて来るわけでありまして、

(一) 駐ソ米大使ケナン氏の召還問題

この間、アメリカの駐ソ大使の、ジョージ・ケナン氏が、ソ連側から好ましかる人物としてアメリカに引取りを命ぜられたことは御承知の通りであります。何故ケナン大使がソ連側から断りを食つたか、直接の理由は、ケナン大使がベルリンで、「今日、ソ連のアメリカに対する態度というものは、アイシー・ゴルドスヘ氷のような冷たさだ」。モスコーにおける自命産の生活といふものは、自命産が嘗て敗戦当時ヒットラー、ドイツに構つておつた時の生活と大抵同じようなものである」と喋つた。それが直接の原因になつております。もちろん、一面の大使が駐在國に對して、世界が非常に嫌がつているヒットラー、ドイツにたとへるといふたようなことは、駐在國に對するエチケツトとしてはどうかと思はれるのであります。板倉事案がそうであるとも、大使が、駐在國に對して、人の嫌がるような言葉を放つてこれを批評することは、問題になると思ひますが、これが動機になりました。ソ連連は、ジョージ・ケナン大使の召還を要求したのであります。しかしこれは動機でありまして、ソ連連がケナン大使の召還を要求しました本當の腹は、ケナン大使みたいな人について、ソ連に居つて

貰いたくないということが本當の理由になつたかと思う。と申しますのは、ケナン大蔵は、アメリカの戦後の対ソ防衛であります。コンテンメント・ポリシー（Containment Policy）（抑止込み政策）の立案者である。今日ソ連が非常に強がつております制度の立案者が、当時國務省の政策企画課長をしていたケナンであります。これにいい感じを持つていた筈はないのでありまして、むしろ、ソ連が昨年の暮にケナン大使のモスコイ赴任に対してアグレマンをやつたところに、初めから懸念があつたと思ふのであります。その當時は、折角トルーマン大統領がやるといふのだから、頭から断つてはいいい感じを持つていなかった。偏々あゝい言動がありましたが、それを徹として断つただけの話だと思ふのであります。そのケナン大使の考へておりましたソ連の封じ込み政策といふものは、戦争後のアメリカの対ソ政策の根本的なものになつております。でありますから、アメリカの対ソ政策の根本的なものを知ります上において、ケナン大使が書きましたものがあり、それが一番本質を衝いていゝと思ひますので、簡単に御紹介申し上げます。

（二）ソ連の性格

ケナン大使の考へによりますと、ソ連の性格といふものは、革命のイデオロギー、それからソ連の歴史的、地理的環境、この二つが集つて出来てゐるものである。ソ連の性格はそれによつて決められてゐるといふのがその前提であります。アメリカのソ連研究といふものは、実は日本ほど進んでゐなかつたといふのは思ふ。といふのは、戦争前は、アメリカは資本主義の国でありまして、ソ連といふたような共産主義の国に対して好意を持つてゐなかつたことは事實であります。國は離れてゐるし、提束さういふ氣はなかつたし、ソ連の研究が足りなかつた。ところが戦争中から戦争後にかけて、ソ連といふものが、非常に強大な國だといふことがわかつて参りました。アメリカにとつて、一番怖るべき相手であるといふことが段々わかるにつれて、アメリカのソ連研究といふものが非常に興味にな

つて参りました。それで、ケナン氏等は昔からソ連に駐在して参りました。ヨーロッパに居る時から、ソ連を一生懸命勉強した。彼が國務省の中心になりましてソ連の研究をやつたのです。ソ連はケナンの話によりますと、共産主義の理論に立つてゐる。資本主義の國といふものは、必然的に倒れるといふマルクスの理論をもとにしてゐる。ところがソ連は御承知の通り、資本主義的に富々と非常に進んでゐる。その後進國に革命が起つた。しかもマルキシズムは革命の理論を教えたが、それはあくまでも現在の資本主義の制度といふものを分析して、そうしてその中の矛盾といふものから資本主義といふものは必然的に倒れるのだといふことを論及したのであつて、その資本主義が倒れて、あとの社会主義といふものがどういふ形のものであるかといふことについてはほとんど書いていない。これは歴史的研究として、學問として、当然の事でありまして、

ソ連は、マルキシズムによつて革命を起しましたけれども、それによつてどういふ社会が作られて行くものであるかといふようなことは、これを論べる方法もないわけでありまして、ただ、レーニン等の考へによりまして、とにかく資本主義的なものは一切排除しなければならぬ。いわゆる労働者、農民、これを中心とする共産党を中心として、反対勢力——資本主義的な、動もすればこれに反撃を加える勢力に対しては、徹底的にこれをなくしてしまわなければならないといふ考の下に、ソヴェト政権を段々々々強固しようとした。といふように解釈してゐるわけでありまして、

しかも、ソ連の革命が起つた後で、日本やアメリカといふような國は、シベリヤ出兵、それからイギリスも兵隊を派遣するといふようなことで、ソ連のポルシェウイキ党は革命後國もなく、世界の資本主義國の反革命の運動によつて、非常に苦しめられた。ですから、ソ連としましてはなおのこと世界の資本主義の援助を受けぬように、國內の資本主義勢力といふものを一掃しなければならぬといふ考の下に、ソヴェト政権を一段と掃するといふことに努めたわけでありまして、反対勢力といふものをなくする為にはともかく味方が

強くなければならぬというわけだ。独裁政權の確立ということに一生懸命になつたわけであり、その結果として、共産党中心の一つの独裁政權が段々盛り上つた。そうしてその上にスターリン首相を戴いているのですが、一つの党というものが、独裁的に非常に有効に、仕事をするために、一番上にあるスターリン首相というものを非常にえらいものにしなければならぬというわけで、今日は、何かと言へば、すべての功績を、スターリン首相の腕に帰するというやり方を取つて来ているわけであり、ます。

そういうふうに独裁的な政權を作るために、国内約にはスターリン首相をトツクとして、一つの強い党の團結を作り出したわけであり、その為には一切の批評を許さない、銘々勝手な批評を許しておらず、いわゆる党の結束というものが乱れて、したがつて党の獨裁力というものが弱まる、一切の批評を許さない、こういうわけで、ソ連の外交官も彼人もなかなかよその人の言い分を聴こうとしない、というようにケナンは解釈している。ソ連の政體の在り方、これによつて起るソ連の人達の考え方、あるいはやり方を見ると、丁度、おもちゃのフリキの自動車みたいである、おもちゃの自動車のネジを巻いてある方向に向ける、すると自動車はそのバネのさく間、滅茶苦茶に、興えられた方向に走つて行く、それと同じように、ソ連の今日の國民あるいは役人、外交官といったようなものは、クレムリンが一度命令を與えると、障礙物のあるまでは一直線に進んで行く、ソ連の認めるところのものは、結局そういう命令だけではどうすることも出来ない、一つの障礙物に接した場合だけである、イデオロギーだけではこれを阻止することは出来ない、客観的な事實に打ち當つた時だけ始めてソ連側は相手というものを認めるのであります、その他の理由というものは聞くことをしない、というソ連の特殊性があるといふのであります。

いま一つ、ソ連の外交政策で非常にやりにくいのは、マルクスは、資本主義というものは必然的に崩潰する、ということと言つたけれども、これはいつ崩潰する、という時日を約束してない、これがソ連

との話合いを進める上において、非常に難しいこととあります、何えばある一つの國に、資本主義が爛熟して崩潰する、という徴候が見える、資本主義經濟が行き詰つて、どこにもならないように見える、その場合において、その國の共産黨は、革命の前途が来たといふので運動を起す、ところが失敗する、普通ならば、自分達がやろうとして失敗すると、ああもう駄目だ、自分達の考は誤つておつたと考へるのが常であるけれども、ソ連の場合は、資本主義は必然的に倒れると言つたけれども、いつ倒れる、という時機の約束をしてない、革命に一つの時間制というものが無い、その為には共産黨は、革命が失敗しても、これはまだ革命の時機が熟していなかつたから失敗したのだ、次の時機を待とうというふうにして、決して自分達のやつた革命運動というものについて諦めない、失敗を認めない、であるから、共産黨はその勢力を得る時にも、あるいは革命運動をやるときにおいても、絶えずチャンスを探し、組織を握つて、いつでもやろうとする、失敗しても、革命をやろうとする、丁度それは、水の流れが高いところから低い所に流れるようなものである、川の氷が深い淵を堰めて、余裕があれば、そこを浸み込んで、隙の穴みたいなものでもあれば、大に堤防を崩して、氾濫しようとしている。

② 氷国の対ソ封じこめ政策

これを、アメリカとして防ぐには、結局その流れに対してどうすることも出来ない客観的な事實を作り上げるより他方法がない、これがケナンの考へ方の根本をなしているものであります、この考へ方に、そして、その彼アメリカの政策というものは、いわゆるコンテンメントポリシー——水のように流れて行く、それを受けて、それを中に押し込むという形をとるより他に方法がない、というので、最初に行われたのは一九四七年のギリシア、トルコの戦争の時でありました、これはその当時、ソ連の勢力がバルカンからラヘル海峡方面に下りて来ようとした、それをギリシアに経済軍事援助を与えることにした、これを強固にして、ソ連の勢力を防ぐとしたのであります、それから一九四八年の後半頃から始められたマーシャル・プラン——西欧における經濟情勢を好転させて、共産主義の過剰と言われる食

を西ヨーロッパから除いて、共產主義の侵入を防ぐというのであります。いわゆる経済的防波堤とも云える。又一九四九年に締結された北大西洋条約は、これをさらに軍事的に裏付けようとしたもので、北アメリカ・ヨーロッパの十二ヶ国を以て、北大西洋防衛同盟を作りまして、その中の一國が外國から攻撃を受けた時は、他の國がこれを援けようという約束をしたのであります。こういうふうなアメリカの政策というものは、ソ連の周辺に、一つの経済的にも軍事的にも強い地帯を作り、これによつてソ連の侵略を封じ込むといふことが中心になつて来たのであります。その後ギリシヤ、トルコが北大西洋条約に入つたことによつて、その防波堤はその後中東近くまで延長され、太平洋方面においては日米安全保障條約が結ばれアンカス條約と呼ばれる瀛洲、ニュージールランド、アメリカ三ヶ國の條約、それからアメリカとフィリッピンとの間の安全保障條約、といったようなもので、十四ヶ國間の共同防衛体制というものを作つてソ連の進出に備えるという態勢をどんどん——進めて來てゐるわけでありす。

四 米大統領選挙と対ソ政策

今日アメリカの大統領選挙は非常に激烈になつておりまして、来月四日には行われるのであります。この大統領選挙を争つてゐる共和党も民主党も、ソ連の勢力というものを力で防ぎたいことだけにつきましましては、一つも違つておりません。つまりアメリカの今の国策といつてもいいわけでありまして、ただアイゼンハワーとステイブンソン、この両派の代表してゐる政党の政策の違いというのは、この封じ込み政策の度合でありまして、最近になりましてアイゼンハワー將軍は、共和党内におきます米北防正の空想、これに少し動かし加へられております。共和党は、非常に共産党嫌いが多いのであります。そういう連中の気持を面する必要があつたのではないかと思ふのであります。あるいは又現在の政府、いわゆる民主党政府を攻撃する材料からでもあつたのであります。アイゼンハワーの最近における対ソ政策というものは、従来より非常に強くなつておりまして、そうしていわゆるロール・バック（

Role Back 政策といふことまでも言い出して來ております。

ロール・バック政策とはどういふものを意味してゐるかと思ひます。今までアメリカがやつてゐました封じ込み政策というものは、むしろソ連側が出て来る危険のあるところを提防を築いて、入られぬように防ぐといふ、どちらかと言へば受身の立場であります。それだけでは駄目で、つまり今まで受身の体制であつた対ソ政策というものを、もうちよつと強くして、これを今まで伸びて來た共産勢力が内側に進み返すといふのがアイゼンハワーが言つてゐるロール・バックの政策であります。これは非常に危険であります。もちろん今までも、この封じ込み政策については議論があつた。封じ込めると言つても一體どの線で封じ込めるのか、アイゼンハワーの、カーテンの外側で封じ込めるのか、あるいはそれだけでは不十分で、ソ連の勢力というものをどん——押し返して、ソ連の内部だけに押し込める封じ込み政策なのか、この点がハッキリしないという議論もあつたのであります。このロール・バック政策は、いわゆるアイゼンハワーの、カーテンの外側で封じ込めるだけでなく、むしろソ連の近郊まで封じ込み政策を漸次進めよう、したがつて、アイゼンハワーによつて共産党の中で苦しんでゐる東ヨーロッパ、あるいは中共の國民を、共産党の権柄の下から解放しようといふのがロール・バック政策になつたのであります。つまり、コンテンメントポリシーをさらに前進させようといふ説であります。

これは非常に危険な考であります。今日、東歐の人運、中共の人運がソ連に對してどう考へてゐるかは別として、級等國民に、共産党の極端を脱して解放しろをいふことを言ひましても、一般國民といふのは今日何等の益もない。つまりアイゼンハワーのロール・バック政策というものを強行するには、アメリカの援助というものがなくては行われぬ。アメリカがこれに對して軍隊を送りて援助する、あるいは武器を供給するといふことになりまして、つまりこれは、アメリカの敵とすると、この戦争といふものを起さざるを得ないといふわけでありまして、ロール・バック政策といふものは非常に危険なものを企んでゐる。だからアメリカ内部におきまして、ロール・バックにつきましても、批判が強い。北大

西洋條約國の軍隊から成つてゐる北大西洋軍の各謀長ブリュンサー將軍等も、實際問題としてこれに反対をしない。何故ならば、これは戦争を意味する。北大西洋軍は勢力を以てアイアン・カーテンの中の國民を援けなければならぬ。その中の國民は、自らの力を以てソ連國の勢力を追つ擲うことは出来ない。これはつまり戦争を意味する。ということから反対してゐる。これはアイゼンハワーとしては非常に行き過ぎではないかというふうに考えられるのであります。

それはさておき、何れにしても、今日アメリカの政策は、ソ連に対してコンチネンタルポリシーをとることにはまだかでありませう。ですからその勢力を拡げて、西ドイツも味方の陣に置き、あるいは日本、今日増んではゐる軍事力といふものも入れる。その周辺に大きな強力な地帯を作つて、共產主義がそれ以上出て来ないようになつてしまふという政策だけは、アメリカとしては、どちらの政策が勝つにしろ私は今後も依然として行つて行くものと思ひます。したがつて、そのアメリカの対ソ政策の中に含まれておられます日本、この日本といふものがアメリカによつて軍事力の強化を要求されるということとは、どちらの政策が勝ちましてもあり得ることだといふふうに考へる。われわれとしては、金銀の点を注意しておかなければならないと考へるのであります。

(六) 米國の政策に対するソ連の考へ方

これに対してソ連はどういうふうな考へを持つてゐるかと思ひますと、ソ連は、アメリカ側のこの政策を非常に心配してゐるわけでありませう。アメリカ側はソ連の勢力を封じ込み、出て来るものを防ぐ、防禦的なものであると言つております。ローレル・バック政策はまさに返すのですから攻撃的なものであるが、今日のローレル・バックが出来ます目的は、防禦的な目的であるのであります。ところが、ソ連側は決して防禦的にとつておりません。ソ連に対して戦争を仕掛けると考へております。と申しますのは、ソ連の革命の父であるレーニンはやはり資本主義といふものを一生懸命研究しまして、帝國主義の理論といふものを作つたのであります。どういふものであるかと申しますと、資本主義の國といふものは段々々々

々々進んで行く。銘々が自分の金儲けの爲に一生懸命物を造る。競争的に造る。その結果は、生産過剰になる。そうするとしまひには値段が下る。さうして恐慌を起す。國內ではカルテルとかトラストといふものを作つた。國民にとつて大加な品物でも、値段の下るのを怖れて少ししか造らないで、出来るだけ金儲けをする政策をとる。それから、あり余る生産力を賣う場には、やはり原料供給、その製品を賣るための市場といふものを出来るだけ確保しなければならぬといふことで、市場を確保しようとする。又原料を獲得するために植民地を取らうとする。といふところから、資本主義の國は段々々々いゝわゆる獨占形態、カルテルとかトラストといふようなものが國內市場を支配する形が段々出来て来る。國外に對しては、植民地や市場といふものを取らうとする運動が盛んになつて来る。その結果として資本主義の國は、やがては市場や植民地といふものを獲得する競争からお互に戦争するといふことも起る。ここにソ連側は共產主義が起る。そしてあつたに共產黨が出来て、自由主義の貿易國內からはなれてゐる。ソ連の進出によつて、資本主義の、帝國主義的の戦争の危険も段々ふえて来てゐる。で、最後には、資本主義の國は、お互に戦争をやめて、お互に連結してソ連を包圍して戦争を仕掛けて、ソヴェト政權をなくそうとする。つまり資本主義國の対ソ包圍といふものは、必然的に帝國主義の理論から起つて来る。といふことを、レーニンは言つてゐるわけでありませう。

さういふ理論を中心としてものを考へるソ連におきましては、終戦前から、ソ連に対して日露軍の防共協定が出来てゐる。あるいは、イギリスがポーランドを、ソ連に對する障壁とした。戦争後において、今日における封じ込め政策、北大西洋條約から日米安全保障條約における自由主義諸國間の防衛態勢といふたような動きは、つまりレーニンの言つたソ連に對する包圍であると考え、實際ソ連側から見ますと、アメリカ側はソ連に對する防禦的態勢の必要から封じ込め政策をやつてゐるかも知れませんが、歴史的に考へてみますと、資本主義國の圧迫を受けてゐるといふ状態から、ソ連にとりまして資本主義國はソ連に對して圧迫しようとしてゐると考へるのは、當然と言へば當然であります。

ソ連は今日、この資本主義国家側の対ソ包囲攻撃というものが、一度はやつて来るといふふうな考えをして、これをソ連側としては何とかして防がなければならぬ、もちろんソ連は非常に広大であるけれども、まだソ連の生産力というものは、アメリカ側に対して非常に劣っている。この間、ソ連の一九五二年のソ連生産力という数字を発表しておりましたが、アメリカに較べると、アメリカの昨年の生産力の四割に過ぎない。スターリン首相は、一九六〇年になるとソ連の生産力はこのくらいになるだろうと演説しておりましたが、一九六〇年における数字も、まだ今日のアメリカの生産力に及ばないくらいで、若し將來の戦争というものが長期戦になるならば、ソ連側にとつて、先ず戦争の勝ち目はないといふふうな考えられるわけであります。第一ソ連としては、折角、資本主義から共產主義への移行というものを進めております時に、わざわざ危険をおかして英米側と戦争する必要はない。ソ連として、ともかくその理論、あるいは從來の歴史的事実が数える資本主義の対ソ行動をいかにして防ぐかということが当面の問題になつてゐる。だからソ連側の政策は、アメリカの封じ込み政策に対して、いかにしてこれを弱めるか、いかにして戦争まで待つて行かないようにするかということが中心になつてゐるわけであります。

先程のレーニンの理論、帝國主義の理論から申しまして、ソ連側がどうしております政策というものは大体三つある。一つは、資本主義の國々は、そういうふうにお互に市場あるいは植民地をめぐつて競争する危険がある。又、第一次大戦、第二次大戦においても、お互に資本主義國は競争してゐる。今後、出来得べくんば、資本主義國間も競争を計り、相互に競争させることによつて、ソ連に対して出来るだけ共同一致して、改めて来ないようにすることが一つ。それから二つには、資本主義の國は帝國主義的傾向になればなるほど國內における労働者の内訌というものが激しくなる。そして國内大衆の、いわゆる資本主義に対する憎恨は一層激しくなつて、そして労働大衆は次第に社会革命のほうに向つて

来る、であるから、ソ連としてはその革命運動を援助、資本主義國の國內における争斗を出来るだけ煽起させるということによつて、その國の力はソ連攻撃に向わないように、出来る可くくればその國に革命が起るような政策をとるといふことが二つ。その三つには、資本主義の國は植民地から原料をとり、あるいは植民地に対して製品を売り広めるといふことを一層強めてゐるので、結局資本主義の本國と植民地に住んでゐる住民の利害の対立は、いよいよ激しくなつて来るといふ傾向を持つてゐる。とすれば、ソ連としては、この利害關係の対立というものを一層激しくすることによつて、資本主義國の製品がその市場で売れなくなる。あるいはその原料を資本主義國で買ふことが出来ないうようにすることによつて、資本主義國の力を弱め、それによつて資本主義國側のソ連に対する競争力というものを弱める。これが從來、ソ連側が資本主義國に対する外交の中心の一つの大きな政策となつて来てゐるわけであります。今日におきまして、大体包囲陣などはなるべく作らせないように、というのが外交政策の基本線です。アメリカ側、自由主義國側は、ソ連の侵略はスキがあればやつて来ようとする。能力がないところには、丁度朝鮮戦争が起つた時のように、能力をもつてその政策をたしかめようとするのであります。そこで朝鮮戦争を機として、アメリカ側の封じ込み政策は、一層強められて来てゐるわけであります。このほかに先きを制するには、ソ連をやつて来ない。ソ連は決して戦争をしてゐるのじゃないと見えさせることが、結局西歐側のソ連に対する包囲陣の形勢を弱めることになるというわけ。ソ連側は一昨年あたりから非常に平和宣伝を開始してゐるわけであります。ソ連は決して戦争しようとしてゐないといふことによつて、ソ連が来るといふようなことのために、軍備を強化し、あるいは対ソ包囲を作るといふ合をゆるめようといふ目的を持つてゐる。ことに日本とドイツが英米側について再軍備せられるといふようなことになりますと、日本やドイツというものは、一次大戦、二次大戦までにどれほどの力を保持つていたかということをお考えしても、非常に危険なことであります。日、独は、アメリカ側の封じ込み政策の非常に大きな拠点となつて、対ソ干渉の先鋒に立つといふようなことがあれば、ソ連にとつ

ては大なることであるというわけで、おそらく日本とドイツというものに対しては、ソ連として非常に心配していることでありまして、今日では、せめて日本、ドイツは中立政策をとる、そうして、米英側の思い通りになつて再軍備してソ連に当らないようにと平和宣伝を行つております。

ソ連の、アメリカの対日政策に對する考え方というものは、つと前にありまして、今度のオ十九回共産党全国大会におきまして、もう一つ傾向は現れております。オ十九回共産党大会の前に、ソ連の「ボルシェウイキ」という雑誌に、スターリン首相が一つの論文を書いていまして、大部分は再教育の問題でありますが、その前半に、國際情勢を分析しまして、「今日世界には、資本主義國とソ連との戦争の危険というものはあるように言つてゐるけれども、若し資本主義國がソ連に對して戦争を仕掛けて来るならば、それは資本主義の自滅を意味するものである。資本主義というものは今日ソ連に對して戦争を容易にやれないだろう。むしろ戦争の危険というものは、ソ連と資本主義の國家の間よりも、資本主義相互の間に起る危険性が非常に多い。例えは今日、イギリスやフランスという國はアメリカの援助を受けてゐる爲に非常な拘束を受けてゐる、やがてはイギリスやフランスはアメリカの支配を脱して獨立の態勢をとるだろう。又、日本やドイツは、今日こそ軍備はなけれども、アメリカの援助を受けてゐる、したがつて國面は次第に普通の軍國主義になつて、アメリカに對抗するようになる。つまり、いろいろな結果として、資本主義國側の間に、戦争というものはより以上起る危険性があるのだ」ということを書いておりました。これは、一面においてはスターリン首相の自分の考えを言ふものと思ひますが、一面においては、外國の政策に利用されることではない、つまり米ソ間に戦争の危険はない、ということ、ソ連側の平和政策に通ずるものであり、これによつて巨國戦を出来るだけゆるめて行く、という目的がある。それから、資本主義國側に戦争の危険性がある、ということ、資本主義國相互の間の商業で、これが一致してソ連に當らないようになる、従来からのやり方を、さらに一層強めることになる、と考へるのであります。それから、オ十九回共産党大会の最後の演説におきまして、スターリンは、「ことに

かくソ連は今後、各國の共産党の解放並に平和運動を大いに支應する」という演説をやつております。これはつまりソ連側としましては、各國の共産党を通じて各國がソ連に對して巨國政策をとらない、とつてみても出来るだけゆるめるようにする。従来からのレーニンの帝國主義の理論から來た國內斗争を惹起する、ことによつて、ソ連に對する戦争を起さないようにしようとする政策の現われだと思ふのであります。

二つの世界の対立と日本のありかた

この二つの世界で今日アメリカ側は對日政策というものをやろうとしてゐる。ソ連側はこれを出来るだけやらせまいとする。ことに既にありましては日本の再軍備問題、西にありましては西ドイツの再軍備問題、これがソ連にとりましては一番頭痛のタネなのであります。ソ連の理論から申しますと、ソ連は中立というものは認めない。資本主義的分子は一掃しなければ社会主義といふものは出来ない、といふふうな考へておられます。どういふ意味から申しますと中立といふものは認めませんけれども、當面の問題としましては、とにかく日本並にドイツといふものは、アメリカ、イギリス側の手によつて再軍備されて、對ソ包圍の先鋒に立つてやるといふことを何よりも考へなければならぬ、ことから、日本ならばにドイツは少くとも中立の状態でなければならぬ、といふことが中立になつてゐる。それだけに日本側の置かれた地位といふものは非常に重要であります。アメリカ側はとにかく日本を出来るだけ利用する。ソ連側は出来るだけこれを防ごうとすることから、日本をめぐる米ソの切き、米ソの圧力といふものは一層激しくなつて来る、と考へてゐます。それだけに、われわれとしては、よほど慎重に考へて行かなければならぬのであります。

（一）平和の意義

どうしたらいいか、ということになりまして、こゝで一朝一夕に申上げることは出来ないものであります。が、たゞ、われわれとして決して忘れていけないことは、日本はとにかくこの狭い國土に、貧弱な資源の上に八千四百万の人を生がして行く、この上から、どうしたらいいか、ということ考へるべきであります。まして、経済力のない今日では日本が世界を動かすことはできないのであります。この世界の動きの

の面において、日本はこれだけのものをいかにして生かして行くか、いかにしてわれわれ、生きるために平和を獲得するかといふことが、日本にとつて一番大膽なことになるのではないかと日本を西方の陣営に入れようとしている勢力の固に立つて、われわれは何とかして日本は平和に生きて行くといふことを一生懸命考えるより他はないと思ひます。具体的にどうするかといふことはお互に研究すべきことで私がこゝで一口に申上げることが出来ないのは出来ないものであります。とにかくわれわれとしては、生きて行くためには平和政策でなければならぬ、日本ではどうしても、経済的にも、また安全保障の上からも、平和でなければ生きて行かれない、しかも世界というものは、両方の対立した陣営が日本をめぐつてゐる。非常に難しい問題でありますか、とにかく日本としては、平和でなくちや生きて行けないといふことが、最高命令である。そのもとにすべてを判断するより他、方法はない、私はこの原則的なものを以外に、申上げざるを得ないものを持つていかなければなりません。これは今後お互に、問題毎に研究するより他方法は無いと思ふのであります。

(二) 時の要素

ただ私が申上げたいのは、アメリカ側の考え、ソ連側の考え方といふものが相当深いものがありますので、世界が果してどうなるか、戦争になるのか平和になるのかといふようなことも実はハッキリ云えませんが、理論的に申し上げますといふと資本主義と社会主義、これは両立しないことになつてゐるわけであり、ことに革命理論から申しましてソ連の特色は、いわゆる資本主義的左分派を一切なくさなければ社会主義の革命は両立しないといふことからしますと、資本主義が崩壊するまでは社会主義のソ連は安んじて行かれないといふことに理論的にはなりますが、しかしそれが直ちに、ではお互に理論的に対立するから米ソは戦争するんだらうといふと、問題にそんなに簡単にには行かない。

私は、非常に日本として此重要なのは、「時」の問題であると思ひます、この時の要素といふものを動もするわれわれは抜いて考える、ソ連の世界革命に対する考えといふものを見ても、一朝一夕に世界

に革命が起るといふようなことは思つておかないので、又ソ連の社会主義から共産主義への移行といふものを考えても、これは大変な問題であります、つまり社会主義の世の中といふものはみんなが同じく、そしてそのゆきに依つて報酬を受けるといふことになつてゐる。今日ソ連は社会主義の國であります、紙々がゆいて、いい切ぎをした人はそれだけ余分なものを貰ふといふシステムになつております。ところが共産主義の世の中になりますと、どういふことを意味するかといふと丁度いいの、厚意の生活と同じである。おやじが蔵いで参りましたお金によつて、めい／＼が必要とする品物を買つてゐる。うちものは——例えば鉄があつても物尺があつても、お嬢さんに使えばお母さんも使う。めい／＼が必要に依つて使う。あるいは食物の中でも、あるものはとにかくめい／＼が好きなように食べる。どういふものを、社会全体に行おうとするのが共産主義であります。とすれば、余程沢山の品物がないと、どういふものを作ることができない。これが限られた物資でありますと、めい／＼がこれを便はうとしたらその品は行きわたらねえから、喧嘩が起る。ですからよほどソ連制が生産力を豊饒にし、めい／＼が好きなだけ使える。好きなだけ食べるといふ情勢まで持つて行かなければ、共産主義の世の中は出来ないわけであり、ソ連側はそれをやる覚悟であります。とすると、社会の革命も世界の革命も共産主義の思想も、一朝一夕に実現するとは考へておりません。長い期間に亘つて実現するといふことを考へなければならぬのであります。

そういう点からしましても、重大な問題を抱いてゐるソ連は、理論的に資本主義と両立しないといつて積極的に戦争を仕掛けるかといふと、私は思ひますし、そうでもないと思ふ。その点をよほど考へて、ソ連の革命といふものが成立するまで、資本主義陣営側と協力して行こうといふ気持があれば、假令それは一時必要な事であるとしても、やはりそれを利用して、平和状態を出来るだけ長くして行くといふことが必要ではないか、何と申しましても、時といふものは非常に妙なものであります。妙なものと云つてはおかしいのではあります、時が最大の守衛であり、といふことを申します。その時はどうしていいかわか

らないほど悲しいと思つても、時が経つとそれがそれほどの悲しみでなくなる。これはどうすることも出来ない事實であり、時というものの力を私共忘れてはならないのであり、若し現在の米ソ間というものは、戦争する氣がないとするならば、將來はともかく、この戦争する氣がないという期間を出来るだけのはして行く、戦争が起らない平和な時代を守つて行くようにすることが必要ではないか。

この点について、わたくしは日本人は非常に悲つかうであり、おかしな例であります。私は、やつと前には、ヨーロッパからシベリヤを通つて歸つて来たことがあります。ハルビンから南滿鐵道の急行列車に乗つたわけであり、乗つてゐる日本人はほとんど日本人であります。ほとんど満州人の客は居ない。乗つてゐる日本人のみに聞いてみましたところ、その人が「いや、満州人というのは妙な連中、どうせこの汽車に乗つたつてその日の中に同じ行先に着くのだ。急行列車に乗つても普通列車に乗つても、自分の行く地点は同じやないか。そうすると、何ぞ好んで急行に乗つて行くか。しかも料金が悪い。本系ならば汽車に乗る時、料金が少なければ料金は安いのが当たり前だ。それを、乗つていざ時限は短くてしかも料金は高い。そんな馬鹿なものに乗る必要はないじゃないか」といふわけだ。満州人はなかなか急行列車に乗らないのだ」といふことを言つておりました。日本人といふのは、一時固く二箇間の遠いでも、高い料金を出して急行列車に乗らうとする。どうしても氣が短いです。どうして、一時固く二箇間、先に着いて非常に仕事のを能率を上げられるのであります。宿屋に宿いて一時固く二箇間が有り、まず、ドナラに着換えて隣近所のパチンコ屋に行く（笑）。こゝを去るなければならぬ。世界といふものはそんな運命通りに行くものでもございませぬ。時限的要素を考へると、とんでもない峻い崖に生ずる。ですから今日ソ連側が若し資本主義側と提携して行こう、將來は打つつかすかも知れないが、今の場合、仲好くして行こうといふ氣持を持つてゐる。又アメリカ側が戦争しようといふ積極的方針を持つてゐないといふのは、この期間をやはりそれが戦略的なものであるといふのであらうと、出来るだけのことは、いふことが非常に大切である。さういふ傾向が出来れば、延期さ

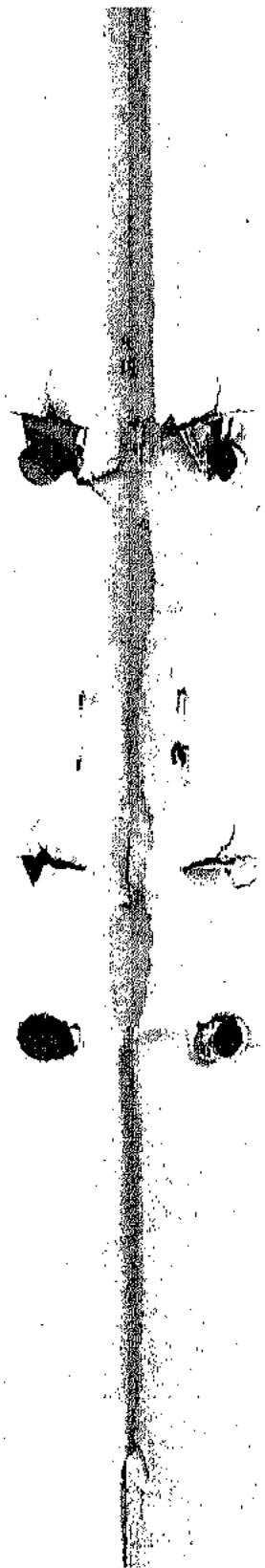
れんことを希望するわけであり、この時に対する考えといふことが、わたくしどもにとつて非常に大切なものではないかと思ひます。

③ 国民の生き方

それからよく皆さんから時限問を受けることがありますが、「あなたがおつしやるように、日本として世界をどうすることも出来なければ、われわれ一体どうしたらいいか」といふことであります。それから又若い人達が、どうせ戦争になるのじゃないか、戦争になるよな世の中であつたら、この隙に、いかに楽しんでいたほうがいいじゃないかと、いや、ヤケ半分の言葉をきくことがあります。これは非常に時限を無視した考え方で、あまり理論的に互に過ぎる結果であると思ひます。將來戦争が起るか、かも知れないうといふことは言えます。しかし、さういふ、將來いつ起るか起らないかわからんといふた問題に、頭を悩まして、その日その日の生活を忘れようといふ様なことは、わたくしどもとして、日本人として非常に遺憾なことではないか、先程申し上げましたけれども、日本は好かれる國にならなければ生きて行かれない、これは單に経済的な問題だけじゃない。とにかく日本といふ國は非常にぎれい、いい國である。こゝろ、このことが、結局は私共世界を日本に好意を持たせる最大の原因になる。日本のような立派な國を、危める國といふものは、その國が悪いのである。平和な國に対して戦争を吹つかけるのは、吹つかける方が悪いので、これはどうしても日本を擁護しなければならぬといふ氣持を起させることが、日本にとつて平和政策の根本であると思ふ。とすれば、われわれは、せんでゐる世界のことを心配しなくても、われわれが毎日／＼なし得る仕事は、決山ある。例えば、自分の住んでゐる國をきれいにする。通りをきれいにする。あるいは、そこを過つてゐる人達を、いゝ氣持にすることであり、わたくしはこの國に、ロンドンに行きまじ、時、イギリスの甲金に行きまじ、道のきれいなこと、みんなが華花を作つて、通る人を慰めることに、努力した。あゝ、ゆう努力といふものが、外國人に、イギリスの生活は非常にきれいなものに感じさせる。世界の人の、日本の日本に対する評価のもとになるんだとすれば、われわれは日常の生活で

日本をい、國にするということとは決山である。ですから、どうしたらいい、かということとは、毎日の生活
をきれいになさ。い、これが結局日本をして、世界において非常にきれいなもので、い、國であるとい
う評價の土台を作らせることにする。これが日本を平和的に生かす唯一の問題じゃないかと思う。つま
り、日本みたいな國を攻める奴があるかという質問を世界に起させることが、日本を一番安全にするこ
とだ。若し攻めて来たら、きつと日本を好きで國が抜けてくれま。そういう態勢が世界に存在するこ
なかなかの國を攻めるということとは出来な。今日スイス、スエーデン、あるいはデンマー
クといったような國に知して、若しどこかの國が攻めこむならば、他の國はきつと援助するだろう。これ
等の國々は中立政策をとっておりま。若しそれが破れることがあれば、他の國々はそれを攻撃した
國に対して一斉に立上ると思う。又そういうことがあるといことがわがりますと、存がな、スイス
スエーデン、デンマークというような平和を愛する國を攻めるわけにはい。そういうようなコン
ディションを作ることが、日本にとつて一番大切な仕事で、しかもこのコンディションを作ることが、
政府が議會で日本の平和政策を説いたところが駄目だ。世界の人民に、日本はきれいな國である、平和を
愛好する國であるということを徹底させることが根本問題だ、とすれば、われわれはどういう世界に
なりましても日本を生かして行くということば、いかなる場合においても出来ることでありま。われ
われは、先程申しましたように、今日世界を動かす経済力、軍事力はないのでありま。日本を平和
に生かすということだけは、われわれの毎日の努力によつて出来ることだといふふうに私は考えてお
りま。そういう点におきましても決して日本の状態というものについて、わたくしは悲觀的に考えてお
りません。われわれの努力次第で、毎日の生活を充実させる、きれいにするこによつて日本を興して
行くことは大分出来るといふふうに、わたくしは信じております。

(終り)



一九五三年三月 日印刷
一九五三年三月 日発行

東京都千代田区大手町一の一七
編集兼 印刷人 芳村省婦人少年局

東京都千代田区富士見町一の一六
印刷人 荻原 謙

印刷所 東京都千代田区富士見町一の一六
協立社